

## 古代インドの暦と「昴」(*kṛttikās*)

阪本（後藤）純子

時の周期的変化 — 昼と夜、月の満ち欠け、季節の移ろい、太陽と星の1年の巡り — をただ受動的に感じるだけでなく、観察と計測により暦という知の体系に作り上げた事は、人間の生活に画期的な進化をもたらしたと考えられる。時を測り位置付ける暦は、農耕・牧畜を初めとする生産活動のみならず宗教儀礼の遂行にも不可欠であり、ヴェーダと総称される古代インド祭式文献において重要な役割を果たしている。

ヴェーダ文献<sup>1)</sup>に残る古代インド暦は、他の多くの古代暦と同様に太陽暦と太陰暦の融合したものであるが、基本は夜空に現れる月の満ち欠けとその白道（天球上の月の軌道）上の位置である。具体的には、白道周辺にはほぼ等間隔に位置する27ないし28の恒星、または星座を月宿 (*nākṣatra-*) と定める<sup>2)</sup>。バビロニアの黄道（天球上の太陽の軌道）12宮、中国の赤道28宿に対して、白道を基準とし、特に満月の位置が重視されたことが注目される。夜空の月が目印であるから、日没から次の日没までを1日とし、朔から次の朔までを1ヶ月とする。月は毎夜、白道上を進みながら異なる月宿に宿り、朔には太陽に宿る。これに関し、男性神である月と妻である諸月宿との関係が月の満ち欠けの起源とともに黒ヤジュールヴェーダ・サンヒター散文<sup>3)</sup>に語られ、また、月と太陽の娘との婚姻がリグヴェーダ X 85 に歌われる。他方、恒星である月宿は太陽暦に従い、季節と共に天空上の位置を変える。従って

満月が位置する月宿は毎月変わり、その月宿の名に基づき朔から朔までの 1 ヶ月が命名される。1 回帰年（約 365.24 日）が 12 の朔望月（約 29.5 日）と閏月（約 11 日；この期間を含む夜は 12 夜）から成ることは既にリグヴェーダ（B.C. 1200 年頃の編纂）において認識されていたものと思われる<sup>4)</sup>。

月の朔望は太陽暦に対し毎年約 11 日ずれるので、満月と太陽年の節目である春分・秋分・夏至・冬至との時間関係も、恒星である月宿との位置関係も毎年変化する。満月が二つの月宿の間に位置することも多い。また望が昼間に起こる場合は、その前後の夜の月のどちらを満月とみなすかという問題が生じる。朔の夜の決定にも同様の困難がある。満月と恒星との位置関係に基づくヴェーダ暦にはこのような曖昧さが付き纏う。

27～28 の月宿名はアタルヴァヴェーダ（B.C. 1000 年以降）に初めて現れる<sup>5)</sup>；黒ヤジュルヴェーダ・サンヒター散文における列挙<sup>6)</sup>は学派により若干相違するが、現在に至るまで受け継がれる。第一の月宿<sup>7)</sup>は一貫して *kṛttikās*（女性名詞 *kṛttikā-* 「糸を紡ぐ女」または「革職人の女」<sup>8)</sup>の複数形）とされ、Pleiades 星団「昴」に同定される。*kṛttikās* は単独の星座名としてもアタルヴァヴェーダに現れ<sup>9)</sup>、更にリグヴェーダ（B.C.12 世紀頃編纂）の「謎の歌」I 164,15－16 で意図されている可能性がある<sup>10)</sup>。満月が *kṛttikās* に宿る朔望月の名称は、その派生語 *kārttikā-* である。27～28 の月宿が *kṛttikās* から始まる以上、1 年が Kārttika 月から始まることが予期されるが、直接にはそのような記述はヴェーダ文献に見られない。

A.D. 2000 年の時点で Pleiades は黄経 60°07'32"（赤経 3 時 45 分 0 秒）に位置し、春分点から約 2 ヶ月離れている。地球から見て、月は朔の時に太陽と同方向に、望の時に太陽と正反対の方向に位置するので、満月が Pleiades の近辺に来るのは、秋分から約 2 ヶ月後を中心に 11 月中旬から 12 月上旬である。他の条件は無視して歳差<sup>11)</sup>からのみ概算すると、およそ B.C. 2300 年頃に Pleiades は春分点と同じ黄経 0°（赤経 0 時）に位置する。その場合は秋

分時に満月が Pleiades (*kṛttikās*) の経度に位置することになり、Kārttika 月は秋分月となる。ただし、月の朔望と太陽暦とのずれから、実際に満月が Pleiades 近辺に位置する夜は秋分を中心に前後に移動する。秋分の後に満月が Pleiades 近辺に宿るという条件であれば、Pleiades の位置が黄道上を約 14 日分ずれた時代となり、B.C. 1300 年頃に該当すると推定される。インド・ヨーロッパ語族に属する言語を話す人々はインド・イラン共通時代から分かれ、B.C. 1500 年頃に現在のアフガニスタン山岳地帯からインダス河上流域に移動したと推測されている。*kṛttikās* が春分点に位置した時代はそれよりも遙かに以前であるが、秋分後の満月が *kṛttikās* の近辺に宿るのは、インド側でヴェーダ祭りが成立しつつあった時代の最初期に重なる。

1 年の区切りをどこに置くかという問題がここで浮上する。一般に太陽暦ないしその影響の強い太陽太陰暦では、1 太陽年の終点= 起点は太陽の死と再生を象徴する冬至に置かれることが多い。他方、より古い起源の太陽太陰暦では、昼と夜の長さが同じになる春分・秋分をもって 1 年を区切り、春分ないし秋分に続く満月を新年として祝う傾向が強いようである。春分か秋分かという選択はそれぞれの文明の条件 — 気候、風土、生産手段、生活形態等 — に応じて為されたと推測される。バビロニア暦やユダヤ旧暦(教暦)、イラン暦では春分が、ユダヤ新暦(政暦)やケルト暦では秋分が新年とされ、バビロニアの新年祭ないしユダヤ暦の過超祭は春分に続く満月に、イランの新年祭は春分に、ユダヤ暦の仮庵祭は秋分に続く満月に執り行われる。欧米の万聖節および前夜のハロウィーンもケルト暦の新年祭に遡る可能性が強い。

ヴェーダ文献では、1 年の区切りを冬至とし、冬至月 (Māgha) の下弦の 8 日 (*ekāṣṭakā-*) を年末、その次の Phālguna 月の満月を年始とする考え方が基本であるが、春分ないし秋分を重視する観念も見られる。1 年を春分月から始める暦法には比較的新しく導入されたバビロニア暦<sup>12)</sup>からの影響が窺える。他方、Kārttika 月の満月に催される Sākamedha 祭<sup>13)</sup>「一緒に繁栄する祭」(翌日に 1 年に一度の大祖霊祭と Rudra 神への Tryambaka 祭を伴う)は、上記

のようにヴェーダ祭式成立の最初期には秋分の後の満月に行われる大祭であり、ユダヤ暦の仮庵祭を想起させる。*kṛttikās* に始まる 27~28 月宿とともに、*Sākamedha* 祭には秋分を新年とする古い暦の痕跡が想定される。この暦がインド・ヨーロッパ語族の内部で成立したのか、他文明、たとえば古代メソポタミアから取り入れられたのか、あるいは人類の共通の遺産であるのか、という問題は今後の解明を待つ。

なお、時代は下るが、ヒンドゥー教の新年祭 *Dīwārī* (古インド・アリア語 *dīpāvalī*-「灯火の列」> 中期インド・アリア語 *dīvāvalī*-> *dīvālī*-> *Hindī dīwārī*-) は *Āśvina* 月 (注 7 参照) 末日と朔の夜、および *Kārttika* 月初日 (新月) を中心に行われる「灯火の祭」である<sup>14)</sup>。一般に起源は不明とされているが、秋分後の新月祭に由来すると考えられ、秋分を起点とする暦を前提とする。灯火という点ではハロウィーン・万聖節との類似が注目される。

- 
- 1) 本稿では約 B.C. 5 世紀以前に成立した、古ウパニシャッドとシュラウターストラまでの文献を指す。ヴェーダ補助学としての暦学ジョーティシャ *Jyotiṣa* (B.C. 400 頃以降バビロニア暦学の影響下に成立、注 12 参照) は含まない。
  - 2) 月宿およびヴェーダ暦に関しては A.A. Macdonell and A.B. Keith, *Vedic Index of Names and Subjects*, London 1912, vol. I s.v. *nakṣatra*, vol. II s.v. *māsa* が概観を与える。基礎的研究としては A. Weber の諸論文が挙げられる: *Die vedischen Nachrichten von den *nakṣatra* (Mondstation) I, II, Abhandlungen der philologisch-historischen Klasse der Königlichen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1860, 283–332, 1861, 267–400; Über den Vedakalender, Namens *Jyotiṣam*, do. 1862, 1–130*。更に、祭式 (祭火設置祭) との関連において、H. Krick, *Das Ritual der Feuergündung (Agnīyādheya)*, Wien 1982, 9–47 参照。
  - 3) *Kāthaka-Saṁhitā* XI 3:147,1–12.

- 
- 4) 本書，後藤敏文「古代インド文献に見る天空地」，6. 年末の12日，参照。
- 5) Śaunaka 派 XIX 7,2 (Paippalāda 派に欠く)。
- 6) 祭式 Agniciti (Agnicayana アグニチャヤナ，大規模火壇構築祭) の解説: Maitrāyaṇī Saṁhitā II 13,20:165,12-166,12; Kāṭhaka-Saṁhitā XXXIX 13:130,14-131,10; Taittirīya-Saṁhitā IV 4,10,1-3。B.C. 8世紀頃編纂か。
- 7) ヴェーダ期より後のインド天文学はギリシア・バビロニア天文学の影響を受け，黄道座標の出発点（春分点）に位置する白羊宮 Aries に倣い *āsvinī* (ved. *āsvayūjau* 双数形；雄羊座  $\beta\gamma$  に同定される) を月宿の先頭に置くようになる（矢野道雄『密教占星術』65f. 参照）。他の条件を無視して歳差（注11）からのみ概算すると，雄羊座  $\beta$ （黄経  $34^{\circ}05'50''$ ）は B.C. 5世紀中頃に，雄羊座  $\gamma$ （黄経  $33^{\circ}18'42''$ ）は B.C. 4世紀後半に黄経  $0^{\circ}$  となり，その時代には Āśvina 月が秋分月となる。
- 8) 語義解釈と文献に関しては M. Mayrhofer, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, Heidelberg 1992, s.v. *kṛttikā*- 参照。
- 9) Śaunaka 派 IX 7,3 (Ed. Viśvabandhu IX 12,3); Paippalāda 派 XIX 139,5。
- 10) 本書，後藤敏文「古代インド文献に見る天空地」，8. 『リグヴェーダ』の星，8.1. 『リグヴェーダ』第1巻第164讃歌「謎の歌」から。
- 11) 36525日間の黄経の一般歳差は A.D. 2000年1月1.5日時点で  $5029''.0966$  とされる（国立天文台編 2009年度理科年表による）。
- 12) Pingree および 矢野によれば B.C. 5世紀頃（ヴェーダ期末期）にイラン経由でインドに伝播した: D. Pingree, *History of Mathematical Astronomy in India*, *Dictionary of Scientific Biography*, Vol. 15, Supplement I, New York 1978, 533-538; 矢野道雄『インド天文学・数学集』（科学の名著1）8, 22f., 巻末表。
- 13) 整備されたヴェーダ祭式体系では季節祭 Cāturmāsya の中に組み入れられている。
- 14) A. V. Kane, *History of Dharmaśāstra V-1*, Poona 1974, 194-210 参照。